

今回は大溝城の歴史についてふれることにします。大溝城が築城されたいきさつは、連載の21回目で紹介していません。織田信長が安土城を築城したころ、琵琶湖のまわりに東西南北に配置された戦略拠点のひとつとして、湖西の守りを固めるために、甥の信澄を城主として築かせました。築城に際しての設計、監督には、信澄の義父である明智光秀があたったと伝えられています。

城が築かれた高島市勝野の地は、古代からの良港であった勝野津を抱え、京の都と北陸地方を結ぶ西近江路が通る、湖上交通と陸上交通の要衝地として栄えていたところでした。

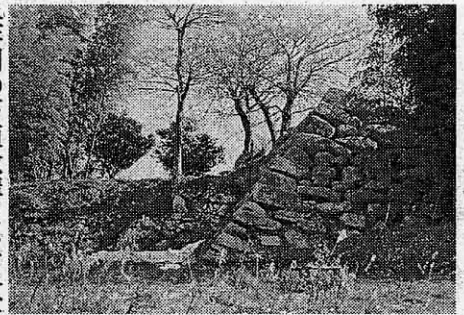
れ、甲賀市の水口岡山城に移築されてしまいました。大溝城当時の姿については、現存する古絵図『織田城郭絵図面』で知ることが出来ます。この古絵図によると、本丸の周囲には琵琶湖からの細い水路で通じる内湖があり、外堀としての役目を果たしていたことがわかります。

また、本丸の他にも家臣たちの屋敷地が並ぶ二ノ丸、三ノ丸を構え、さらにその外側には商・工業に携わる人々を住ませた城下町がつくられました。

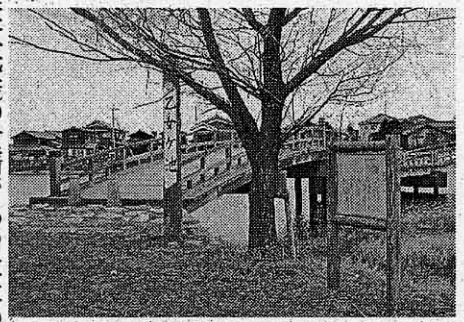
天正6(1578)年の建築当初の遺構としては、JR高島駅を降りて琵琶湖側に5分ほど歩いたところにある、本丸天守台の石垣が見どころです。石垣には、安土城築城に使用されたものよりも豪壮な巨石が使用されており、天

勝野津の大溝城

大溝城天守台の石垣
||高島市勝野



大溝城の外堀だった乙女ヶ池
||高島市勝野



正年間の石垣遺構としてはたいへん貴重なものとされています。さらに、この石垣遺構から南東側に足をのばすと、現在は「乙女ヶ池公園」として整備されている、かつての天然の外堀である内湖を一望できます。

天正10(1582)年に本能寺の変で光秀が信長に謀反を起こすと、城主であった信

澄は光秀の女婿であったために疑われ、織田信孝(信長の3男)と丹羽長秀らに自害させられてしまいます。信澄死後、勝野の地は城主がめまぐらしく代わり荒廃してしまいました。

元和5(1619)年、分部光信が伊勢国上野から入封し、三ノ丸があった場所に陣屋を構えると、信澄時代の城

下町を土台としながら近代的な城下町への整備を進めました。城下町の各通りには、道路の中央に生活用水や防火用水として活用されていた石垣水路が走り、独特の町並みを形成していました。

現在、町の各所には「蝸蠲町」「紺屋町」といった、城下町時代の町名を示した表示板や石標が配置され、往時の町並みを垣間見ることが出来ます。一つ一つ探しながら江戸時代の城下町を探訪してみれば、いかがでしょうか。

また、この地は、古代以来の水運・陸運の要衝地であったため、物資流通の基地となりました。街中を歩いてみると、今もどっしりとした商家や造り酒屋などの建物が残り、高島商人の繁栄を偲ぶことができます。

(滋賀県文化財保護協会 田中咲子)

安土城しのぐ豪壮石垣